日本語の論説文における文構造について

－日本語母語大学院生，大学生、日本語学習者の副詞節の比較から－

浅井美恵子
名古屋大学国際言語文化研究科日本言語文化専攻大学院生
masai@mbp.ocn.ne.jp

1.研究の目的

レポートや論文などの論説的な文章では、首尾一貫した論理展開が求められ、これには接続表現や指示詞など様々な言語形式が関わっている。接続表現の一つである接続助詞等を伴う副詞節は節と節の論理展開を明示しており、文章の首尾一貫性において重要な役割を担っていると思われる。

本研究では日本語母語の大学院生、大学生、日本語学習者の作文内の副詞節の種類と使用頻度を比較し、その相違点を明らかにする。

2.先行研究の問題点

田代(1995)では、文構造の複雑さを見るために日本語母語話者と日本語学習者の作文中の文構造を調査し、接続助詞類の使用状況について分析している。浅井(1999)では、日本語母語話者と日本語学習者の副詞節の相違点を機能別、接続語句別に分析し、日本語学習者では 1)目的の節をあまり用いない、2)条件の「たら」、逆接の「けれども」類の使用頻度が高いことを指摘した。

これらの日本語母語話者の作文と日本語学習者の作文の比較では、日本語の論説的な作文の際に母語に関係なく注意すべき点と、日本語学習者が特に注意すべき点を区別できない。よりきめ細かい指導を行うために、これらの相違点を明らかにする必要があると思われる。

3.作文分析

日本語母語の大学院生（以下大学院生とする）30 名、日本語母語の大学生（以下大学生とする）46 名、中国語母語の日本語学習者（以下学習者とする）28 名の「ゴミ問題の現状と解決法」というテーマの作文を分析資料とする。被調査者は

全員文科系を専攻としている。大学生は全員これまでに論文を書いた経験がない。学習者は日本語能力試験 1 級を持つ大学院生と大学院研究生である。

作文資料収集の際には時間的制約はせず、内容と目的の制約として「ゴミ処理のコスト」「埋め立て地」というキーワードを設定し、800 字程度の授業のレポートとして書くことを指示した。

本研究では作文資料内の副詞節を、益岡・田窪(1992)に基づいて接続語句別に使用頻度を求め、それをグループ別に比較、考察した。

4.結果と考察

副詞節の使用数は大学院生 255 例、大学生 412 例、学習者 309 例であった。全体の節数に対する副詞節の割合は、大学院生 15.7%、大学生 15.3%、学習者 19.8%で、学習者が最も割合が高かった。

接続語句別に見ると（表参照)、大学院生、大学生、学習者すべてのグループにおいて、「ば」、「と」（条件)、「ても」（譲歩）が 3 グループ共通して多く用いられている。

(1) [[それができれば]、環境への影響という問題も解決へ踏み出すはずだ]。（大学院生:以下下線は筆者）

(2) [[これ以外のごみ袋を使用すると]回収されない]。(大学生）

(3) [[物質的な生活をいくら追求していっても]、きりがない]。(学習者）

論説的な文章の場合、節と節の論理関係を明確に表そうとするため、条件、譲歩、理由といった機能を持つ接続語句が多く用いられていると考えられる。

グループごとにみられる特徴として、まず「ため(に)」には原因・理由の用法と目的の用法があるが、学習者では原因の用法が 2 例、目的の用法が 17 例であり、ほとんど目的の用法で使われている。

(4) [しかし、新しい埋め立て地を作ることは、[特に最近建設予定地付近の住民による反対運動が強いため]難しい]。(大学院生:原因）

(5) [また[ゴミを処理するために]高いコストをかけなければならない]。(学習者:目的）

村田(2002)において論文ではどちらの用法も使用頻度が高いと示されているが、学習者では原因・理由の場合は「から」「ので」など他の接続語句で表せるので、「ため(に)」を主に目的で使っていると考えられる。また、原因・理由を表す「ため(に)」の前には状態述語がくるという制限があり、誤用を避けるため使用を回

避している可能性もある。

浅井(1999)で指摘した条件の「たら」は学習者が 18 例、大学生 12 例で、学習者だけでなく大学生でも大学院生(3 例)より多く見られた。

(6) [その再利用可能部分は、[私の出身地の中国と比べたら]だんぜんに多いです]。(学習者)

(7) [また、[冷蔵庫が壊れたら]、それもまた粗大ゴミとして扱われる]。(大学生)

同じ条件の接続語句でも、益岡(1997)では「ば」の文は一般的な因果関係を示し、「たら」の文は個別的事態間の依存関係を示しており、「ば」の方が論理性が強いとしている。この違いが論説的な文章での使用頻度の差になっていると考えられる。

逆接の「けれども」類も学習者では 10 例、大学生では 7 例用いられているが、大学院生では 1 例のみであった。

(8) [[それは普通庶民にたいして便利と思いますけど]、環境保護にとってあまりよくないです]。(学習者)

(9) [[国や自治体も対策は立てているのだろうけれど]なかなか結果として表されない]。(大学生)

森田(1988)では「けれども」と逆接的並列の「が」はほぼ同じ働きの助詞として用いられるが、「けれども」は話し言葉的で、「が」は書き言葉的であるとしている。この文体差のため、大学院生ではほとんど使用されていないと思われる。文体差を意識した作文の困難さは小野(1995)でも指摘されている。語句の文体差については母語話者、学習者の関係なく注意をすべきであろう。

一方、副詞節に分類される「て」[1]は大学生では 32 例で、使用割合が低い。大学院生では 37 例、学習者では 51 例であった。

(10) [つまり、ゴミ問題は[経済、環境をも視野に入れて]取り組むべき複雑な問題なのである]。(大学院生)

「て」は文体の面から連用中止と比較される。「て」は連用中止よりも口語的であるため、日本語母語話者は連体中止を多く用いるようである。田代(1995)などでは学習者の「て」の多用が問題となっており、「て」と連用中止の使用の相違については並列節も含めて検討する必要があるが、今後の課題としたい。

5.まとめ

今回は大学院生、大学生、学習者の作文内の副詞節の使用にはどんな特徴が見

られるか、どんな相違点があるのかをみるにとどまったが、今後それぞれの相違点がどのように関わっているのか、連体節や並列節など他の接続節とどのように関連しているのかも明らかにしていく必要がある。これによって、日本語母語話者、日本語学習者の論説的作文指導に役立つ示唆が見出せると思われる。

＜注＞1　副詞節に分類される「て」には付帯状況、手段、原因などがある。この他に並列節に分類される「て」もある。

＜参考文献＞

浅井美恵子(1999)「上級学習者の作文における複文・重文構造について」名古屋大学大学院文学研究科日本言語文化専攻修士学位論文

小野るり子(1995)「日本語を母語とする学習者の書き言葉に対する意識－自己紹介の作文において－」『日本語と日本語教育 23 号』慶應義塾大学 pp.99-119

田代ひとみ(1995)「中上級学習者の文章表現の問題点－不自然さ・わかりにくさの原因をさぐる－」『日本語教育 85 号』pp.25-37

益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法－改訂版－』くろしお出版

益岡隆志(1997)『複文』くろしお出版

村田年(2002)「論理的展開を支える機能語句－接続語句による文章のジャンル判別を通じて」『計量国語学 23(4)』pp.185-206

森田良行(1988)『基礎日本語辞典』角川書店

表　接続語句別使用数（上位 7 項目）

順位	J		255	C		309	S		412
1	ば（条件）	34	12.9%	ば（条件）	36	11.7%	ば（条件）	58	14.1%
2	ため（に）（目的）	19	7.2%	と（条件）	25	8.1%	と（条件）	37	9.0%
3	ても（譲歩）	18	6.8%	から（理由）	20	6.5%	ため（に）(目的）	34	8.3%
4	ように（目的）	17	6.5%	ても（譲歩）	20	6.5%	ても(譲歩）	32	7.8%
5	て（付帯状況）	16	6.1%	て（付帯状況）	20	6.5%	から（理由）	27	6.6%
6	と（条件）	15	5.7%	たら（条件）	18	5.8%	ため（に）(理由）	19	4.6%
7	から（理由）	15	5.7%	ため（に）（目的）	17	5.5%	時（に）（時）	14	3.4%